

知的障害特別支援学校小学部における家庭学習支援 —オンデマンド動画教材の開発とチャレンジ日記の活用—

滝澤 健 ・ 武藏 博文*
(香川県立香川中部養護学校) (高度教職実践専攻)

761-8057 高松市田村町784 香川県立香川中部養護学校
*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学研究科

Home Learning Support in Elementary School for Special Needs Children with Intellectual Disabilities : Development of On-demand Video Teaching Materials and Utilization of Challenge Diaries

Ken Takizawa and Hirofumi Musashi*

Kagawa Prefectural Kagawa Chubu School for Special education, 784 Tamura-cho, Takamatsu 761-8057

**Graduate School of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

要 旨 本研究は、知的障害特別支援学校小学部の児童、保護者を対象に、オンデマンド動画教材とチャレンジ日記を活用した家庭学習支援を実施した。週単位の実施率に差はあったものの、参加者の約半数が家庭学習を約4か月間、継続して実施した。結果から、ICTを活用した家庭学習支援の条件として、動画教材により家庭学習の選択肢が広がる可能性や、チャレンジ日記を通じた学校と家庭との連携の重要性等が示唆された。

キーワード 知的障害特別支援学校 家庭学習支援 動画教材 ICT活用 チャレンジ日記

I. 研究の背景と目的

2020年5月、新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、学校現場では約2か月間の臨時休業が実施された。「特別支援学校における新型コロナウイルス感染症対策に関する考え方と取組」(文部科学省, 2020b)では、学校再開後も感染の状況による臨時休業措置に備えて、学校の授業とICT等を活用した家庭における学習をスムーズにつなぐための準備を予め行っておく必要性が示された。

また、青木(2020)は、臨時休業によって、「これまで学校でタブレットを様々活用してきたが、それを家庭で使うという部分が足りなかった」、「長期休業中に課す宿題はプリント学習が多く、休み明けでないと評価できないため、やりっぱなし、やらせっぱなしになってしまう」等、これまで既にあった知的障害特別支援学校における長期休業中の課題が可視化されたと

指摘している。従来のプリント教材や自作教材の提供といった家庭学習支援では、臨時休業や長期休業には十分に対応できず、日頃の教育実践において、家庭でのICT活用を想定する視点が求められている。

臨時休業中のICTを活用した家庭学習の先行事例として筑波大学附属久里浜特別支援学校の動画配信サイト「のびのびチャンネル」の取組がある(筑波大学附属久里浜特別支援学校, 2020)。「歌」「絵本」等、子どもの興味関心を踏まえて学級担任や養護教諭が動画教材を作成し、オンデマンド配信で提供された。また、「日課に組み込んで行うこと」等、保護者に向けた取組の留意点もサイト上で公開されている。成果として「保護者が家事をしている間、絵本の読み聞かせの動画を一人で見え過ごすことができた」等が報告されたが、本事例は、特殊な状況下の対応であり、実施期間も短い。そのため、動画教材の提供方法以外の、

つまりきへの対応や保護者の児童へのかかわり方、家庭学習を継続させるための支援等、明らかになっていない点が多い。

さて、家庭学習の継続を支援する方法として、連絡帳や交換記録ツール（ほめたよ日記）を活用した実践が報告されている（岡村，2015；武藏・高畑，2003）。

岡村（2015）は、特別支援学校小学部に在籍する自閉症児の母親に対し要求言語行動や身辺処理スキルの獲得を支援した。負担を軽減した手続きの作成，母親の日々の記録に基づくフィードバック，連絡帳による肯定的な評価により，母親の主體的な取組を促し，要求言語行動等を獲得させた。

武藏ら（2003）は、重度知的障害の生徒に対し，機能的アセスメントにより行動の機能を推定し，問題行動の代替行動や運動，手伝い等を標的行動として設定した。標的行動の生起に対し，交換記録ツール「ほめたよ日記」による他者評価，自己確認の手続きを学校と家庭で実行し，問題行動を低減させた。保護者への有効的な支援として，家庭で実行しやすい支援ツールの提供，望ましい行動の具体的な例示，具体的な目標設定，先行事例の紹介を挙げている。

2つの実践から，家庭学習の継続には，本人，保護者，教師が連絡帳や交換記録ツールを介して，家庭学習の進捗状況を相互にやりとりし，互いに強化し合う関係を形成することの重要性が示唆される。

以上のことから，知的障害のある児童に向けたICTを活用した動画教材を開発し，家庭学習の継続を支援することは，従来の家庭学習支援の在り方を見直す契機となり，児童や保護者の前向きな家庭学習の取組を促進することにつながるものと考えられる。

そこで，本研究では，新型コロナウイルスによる臨時休業中の家庭学習の実態を明らかにすることを第一の目的とする。そして，その実態に応じて知的障害児に向けた家庭学習のためのオンデマンド動画教材を開発し，チャレンジ日記により家庭学習の継続を支援する。オンデマンド動画教材やチャレンジ日記による支援が，家庭学習の実施方法や保護者の児童へのかかわり方，家庭学習の継続に及ぼす効果を明らかにし，ICTを活用した家庭学習支援の条件について検討することを第二の目的とする。

Ⅱ. 研究1

1. 目的

知的障害特別支援学校小学部における新型コロナウ

イルスによる臨時休業中の家庭学習の実態を明らかにする。

2. 方法

(1) 対象

A市の知的障害特別支援学校小学部に在籍する児童の保護者83名と担任教師36名を対象とした。

(2) 倫理上の配慮

本調査の実施と公表に当たっては，保護者，担任教師に研究の趣旨ならびに個人情報取り扱いを書面で説明し承諾を得た上で，学校長の許可を得て倫理面に配慮して行った。

(3) 保護者へのアンケート

X年7月に家庭のICT環境と臨時休業中の過ごし方に関するアンケートを実施した。アンケート項目は，「家庭のネットワーク環境，利用端末」「臨時休業中の家庭学習の頻度」，「使用教材」「臨時休業中に困ったこと」等であった。

(4) 担任教師へのアンケート

X年7月に学校でのICT機器活用と臨時休業中の家庭への支援についてアンケートを実施した。アンケート項目は，「学校でのICT機器利用頻度」「臨時休業中に行った家庭への支援内容」等であった。

3. 結果

(1) 保護者へのアンケート結果

保護者76名から回答を得た（回収率92%）。結果，ほとんどの家庭にネットワーク環境があり（93%），児童が使用可能な端末は，パソコン（35.3%），スマホ（64.5%），タブレット（54%）であった。臨時休業中の家庭学習の頻度は，毎日（23%），週2，3日（24%），週1日（8%），ほとんどできていない（45%）であった。使用した教材は，学校から提供された自作教材（35.5%），プリント（26.3%）が多数を占め，ICT機器（8.2%）を利用したものは少なかった。臨時休業中に困ったことでは，生活リズムに関すること（25%）が最も多く，外出制限（18.4%），運動不足（6.6%），課題内容ややり方に関すること（7.9%），行動問題に関すること（9.2%）であった。

(2) 担任教師へのアンケート結果

担任教師36名全員から回答を得た。学校でのICT機器活用は，毎日（60%），週2，3日（34%），週1日（3%），ほとんどなし（3%）であった。臨時休業中の家庭への支援内容は，児童の様子聞き取り

(97.2%) が最も多く実施され、次いで、教材の提供(63.9%)であった。生活(19.4%)、及び学習(5.6%)に関するアドバイスは少なかった。

4. 考察

保護者、担任教師のアンケート結果から、臨時休業期間中、約半数の児童が家庭学習に取り組めていなかったことが明らかになった。家庭学習を実施した児童の使用教材は、学校から提供されたプリントや自作教材が中心で、ICT機器を活用はほとんどなく、文部科学省の調査(2020a)と同様の結果となった。学校でのICT機器活用は行われているものの、家庭での利用を見据えた支援が十分でなかったことがうかがえる。ICT機器を活用した家庭学習を検討することは、今後の長期休業中の家庭学習の新たなオプションとなり得る可能性があり、家庭生活の質の向上を図る上で重要である。

担任教師による臨時休業中の家庭への支援内容は、児童の様子の聞き取りが中心で、生活、学習面に関する継続的なアドバイスは少なかった。長期休業中の保護者の困り感に対応するには、教材提供で留まることなく、家庭学習を介して、肯定的なフィードバックやつまづきへの対応等、継続的なやりとりが求められると考える。

Ⅲ. 研究2

1. 目的

家庭学習を支援するためのオンデマンド動画教材を開発し、家庭学習を継続するためにチャレンジ日記を活用し、その効果を検討する。

2. 方法

(1) 参加者

A市の知的障害特別支援学校小学部に在籍する児童の保護者83名に児童用オンデマンド動画教材の一覧表(QRコード)と実施方法を説明したプリントをX年9

月初旬に配布し、約1週間の視聴期間を設けた後、参加者を募った。29名の保護者が参加を希望した。参加者の内訳は1年生7名、2年生6名、3年生6名、5年生3名、6年生7名であった。

(2) 倫理上の配慮

本研究の実施と公表に当たっては、参加児童の保護者に研究趣旨ならびに個人情報の取り扱いを書面で説明し承諾を得た上で、学校長の許可を得て倫理面に配慮して行った。

(3) 支援期間

X年9月15日～12月20日までの約4か月間(97日間)で、第I期を1週～7週、第II期を8週～14週とした。12月21日～1月10日までの冬季休業日を含む21日間(15週～17週)をフォローアップ期とした(以下、FU期)。

(4) 家庭学習支援のための教材

1) 児童用オンデマンド動画教材

「手伝い」「身辺処理」「運動」など、家庭生活に即した内容で、できるだけ家庭内にある道具で実施できる課題を用意し、家庭での実行性を考慮した。課題は複数用意し、目標行動として選択できるようにした(表1)。動画教材の提供方法は、各家庭の生活状況に合わせて各自のペースで取り組めるように、YouTubeをプラットフォームにオンデマンドによる限定配信を行った。各動画教材のQRコードを作成し一覧表にしたプリントを保護者及び担任教師に配布した。

動画教材の構成は、「教示」、「モデリング」、「振り返り」を基本とした。各動画教材の長さは、児童の集中力に配慮して2～6分程度にした。教示では、イラストや写真を使用し、できるだけ短い言葉で課題のねらい(手を洗うとばい菌がいなくなること等)を説明するようにした。モデリングでは、第一筆者(以下、筆者)が出演した手本動画を示した。振り返りでは、チャレンジ日記にシールを貼ることを児童に促したり、称賛したりする動画を示した。利用方法の留意点

表1 児童用オンデマンド動画教材の内容

	第I期(1週～7週)			第II期(8週～14週)		
	身辺	手伝い	運動	身辺	手伝い	運動
手洗い	ドアノブ拭き、台拭き	ペットボトル洗い	タオル体操	うがい※	食器洗い	フープ縄跳び
	タオル畳み	等	体幹トレーニング	入浴(洗髪)	靴そろえ	踏み台昇降
			キャップばさみ	シートベルト※	タオル収納※	

※うがい、シートベルト、タオル収納は個別のニーズに応じて作成したもので、参加者全員にも追加配信した。

として、手本動画の速度がYouTubeの画面上で調整できることや、一時停止をして見せること等を、各動画の概要欄に掲載した。作成には、「PowerPoint365」「Adobe Premiere Elements」のソフトを使用した。

2) 保護者用オンデマンド動画教材

児童が家庭学習に取り組むための支援方法について、山上(1998)を参考に動画教材を作成した(表2)。内容は応用行動分析学に基づいたもので「チャレンジを始めるためのポイント」「望ましい行動の増やし方(強化)」「わかるように伝える工夫(環境調整)」「上手な手助けの仕方(課題分析, プロンプト)」の計4本であった。できるだけ専門用語を用いず、実際の目標行動を例示しながら、イラストや写真を使用したプレゼンテーション動画で、具体的に児童への関わり方を説明するようにした。手軽に視聴できるよう、各動画の長さは3分程度に収まるようにした。作成には「PowerPoint365」を使用した。

3) チャレンジ日記

チャレンジ日記は、武藏・高畑(2006)を参考に作成した。日記カードには、目標行動を記述する欄、保護者と担任教師によるコメント欄を設けた。また、児童が目標行動を実行した後、シールを貼って記録するための欄を日記カードの1頁に4つ設けた。様式は児童の書字や理解力に応じた3種類のデザインを用意し、児童や保護者、担任教師が選択できるようにした。日記ファイルの表紙裏にはシールを入れるための封筒を貼り付け、表紙裏の余白には、個別に追加した動画教材のQRコードを貼るようにした(図1)。

(5) 担任教師、保護者への支援手続き

担任教師36名に対して、夏季休業中(X年8月下旬)にオンデマンド動画教材やチャレンジ日記による家庭支援について約1時間に渡って事前に説明を行った。

保護者には、担任教師を通じてチャレンジ日記と実施方法を説明したプリントを配布した。保護者と担任教師で目標を決定し、指導を開始した。担任教師には、チャレンジ日記のコメント欄を通じて児童、保護

者に励ましや称賛、助言の実施を依頼した。

家庭学習の実施状況を把握するために、筆者が週1回来校し、チャレンジ日記を確認した。保護者のコメント欄に気になる記述や担任教師から相談があった場合は改善案を協議した。保護者のニーズに応じて動画教材を追加することや、児童の状態や家庭の状況に適合させるために動画教材の修正や支援ツールの提供等の支援を行った。

第I期には、オンデマンド動画教材を児童用9本、保護者用4本配信した。第II期には、保護者の要望を基に、より個々のニーズに応じた内容を中心に8本の動画教材を配信した。FU期は、冬季休業中の実施に

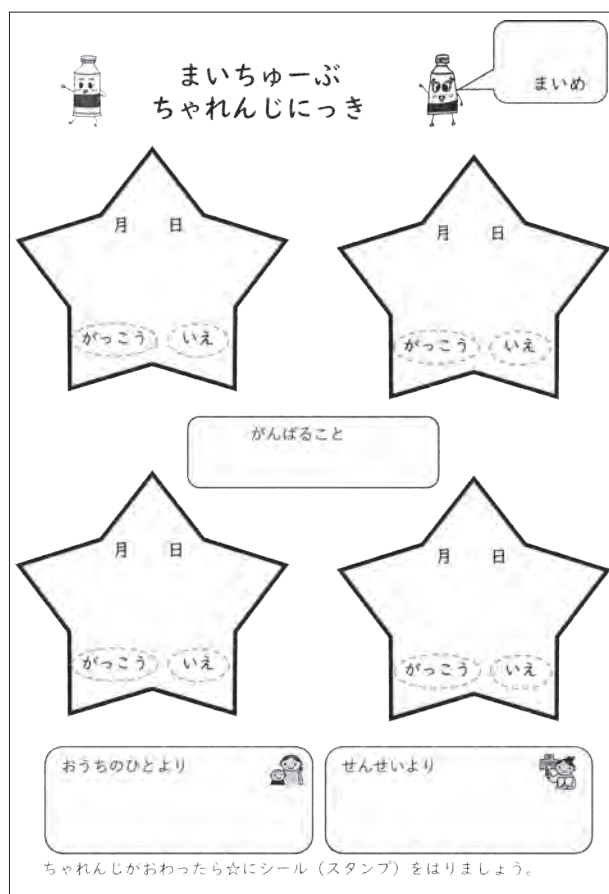


図1 チャレンジ日記

表2 保護者用オンデマンド動画教材の内容

1週	5週	6週	7週
「チャレンジ」を始めるためのポイント	望ましい行動の増やし方(強化)	わかるように伝える工夫(環境調整)	上手な手助けの仕方(課題分析, プロンプト)
事前に予告する	行動が増える仕組み	具体的な指示の伝え方	できる部分, つまづき評価
時間を決めて行う	強化のタイミング	視覚的なやり方の伝え方	手助けのタイミング
活動場所を明確にする等	ご褒美の設定方法 等	禁止の伝え方 等	行動の見守り方 等

ついて参加者の任意であること、実施した場合はチャレンジ日記に記録し休業明けに持参することを、担任教師を通じて保護者に依頼した。

(6) 評価及び測定

1) 家庭学習の実施状況

各参加者のチャレンジ日記から、取り組んだ内容、実施回数、保護者・担任教師のコメント欄の記述内容を記録した。週ごとの家庭学習の実施日数をカウントし、週0日、週1～2日、週3～4、週5～7日のグループに分け、実施人数の割合を求めた。1日に複数回実施した場合も、1日とカウントした。

2) 保護者へのアンケート

①家庭学習の頻度

事前（視聴期間後）、事後（14週後）に、現在の家庭学習の頻度を「毎日」「週2、3日」「週1日」「ほとんどない」で評定することを求めた。

②児童用オンデマンド動画教材の評価

事前（視聴期間後）、中間（7週後）、事後（14週後）にアンケートを実施した。アンケート項目は、「生活する上で大切な内容か（重要性）」「今すぐにできてほしい内容か（優先性）」「家庭でできそうな内容か（実用性）」の3観点で、5件法で評定することを求めた。

③保護者用オンデマンド動画教材の評価

中間（7週後）と事後（14週後）にアンケートを実施した。アンケート項目は「動画の内容は理解できたか（理解）」「実際場面で役に立つ内容だったか（実用性）」の2観点で、5件法で評定することを求めた。

④チャレンジ日記の評価

事後（14週後）にアンケートを実施した。アンケート項目は「家庭学習を継続するのに役立ったか（有効性）」「お子様の意欲を高めるのに有効だったか（意欲）」「記録をつけることへの負担はあったか（負担）」の3観点で、5件法で評定することを求めた。

加えて、本プログラムへの意見、要望について、自由記述欄を設けた。

3) 担任教師へのアンケート

参加者の担任教師24名を対象に、事後（第14週後）にアンケートを実施した。

児童用オンデマンド動画教材、保護者用オンデマンド動画教材について、「家庭学習を支援するのに役立つと考えるか（有効性）」「家庭学習を支援するのに必要か（必要性）」の2観点で、5件法で評定することを求めた。担任教師が動画教材を見なかった場合を想定して「0わからない」の評価点を設けた。

チャレンジ日記については、「家庭学習を支援するのに役に立ったか（有効性）」「参加者の意欲を高めるのに有効だったか（意欲）」「保護者のコメントに対して称賛、励まし、助言等を行うのに負担はあったか（負担）」の3観点で、5件法で評定することを求めた。加えて、本プログラムへの意見、要望について、自由記述欄を設けた。

(7) 抽出事例の指導経過

担任教師または保護者から、筆者に対して家庭学習に関する助言依頼や動画教材の要望があったケースの中から3名を抽出し支援経過を分析した。その内、1名（S10）について、チャレンジ日記のコメント欄の記述や、担任教師と筆者による支援内容についてまとめた。

1) 抽出事例の実態・事前アンケートの結果

S10は、2年生男児で、重度知的障害とASDの診断があった。太田のステージ評価（X年6月実施）はStage IIで、日常の簡単な指示理解や、「シールください」等、絵カードを使用した二語文の要求行動が可能であった。日本版Vineland II（X年9月実施）では、適応行動総合得点32、コミュニケーション36、日常生活スキル31、社会性30であった。事前アンケートからは、家庭学習にほとんど取り組んでいない実態があり、保護者の自由記述には、「できればやらせたいのですが、子どもを誘うタイミングが悪いのかまだ取り組めていません」と家庭学習の取り掛かりへの不安が訴えられた。

2) 目標設定、支援手続き

保護者の要望を基に、担任教師と筆者が目標行動について協議した。週1回、筆者の来校時に、チャレンジ日記の保護者の記述欄を確認し、担任教師へ進捗状況の聞き取りを行った。保護者及び、担任教師からの相談内容に応じて、課題分析による評価、動画教材の修正や教材の改善等の助言を行った。

3) 倫理上の配慮

対象児童の保護者と担任教師に対し、抽出事例として公表する趣旨を口頭及び書面で説明し、同意を得た。

3. 結果

(1) 家庭学習の実施状況

参加者の週ごとの家庭学習の実施日数の変容を図2に示す。29名中、チャレンジ日記の提出が一度もなかった3名を除く26名が家庭学習に取り組むことがで

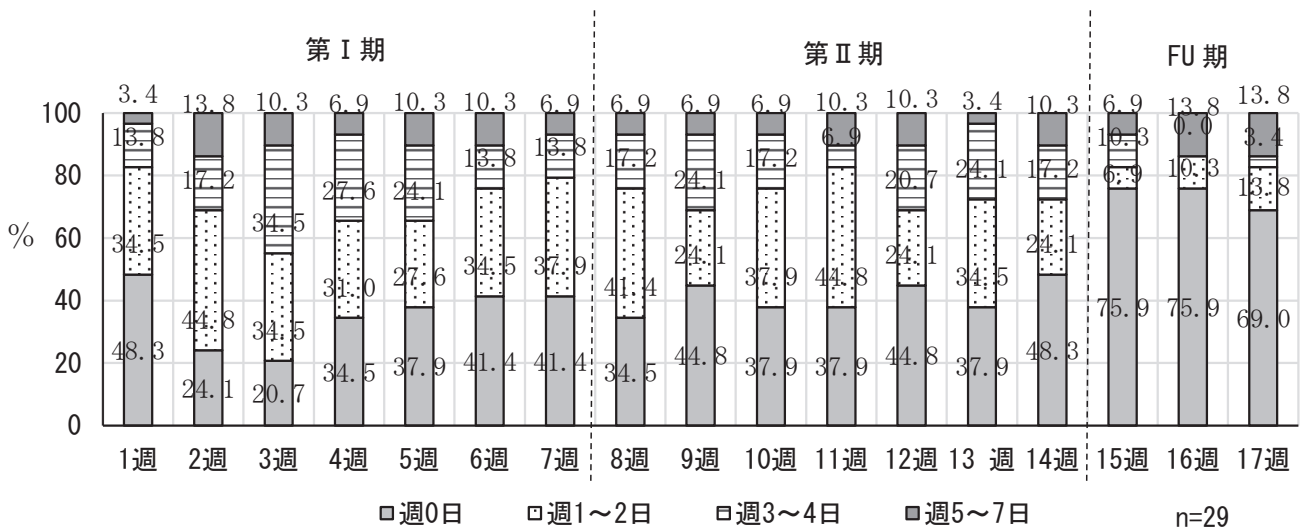


図2 参加者の週ごとの家庭学習の実施日数の変容

きた。3週目の家庭学習の実施率が最も高く、参加者の79.3%が実施した（週0日20.7%，週1～2日34.5%，週3～4日34.5%，週5～7日10.3%）。

週5～7日の実施者の割合は、2週目が最も多かったが全体を通して変化が少なかった。週3～4日の実施者の割合は、3週目をピークに7週目にかけて減少した（34.5%→13.8%）。週1～2日の実施者の割合は、2週目が最も多く、第Ⅱ期の8週目から9週目にかけて減少した（41.4%→24.1%）。週0日の実施者の割合は3週目が最も少なく、4週目で増え（20.7%→34.5%）、14週目までが同じ傾向が続いた。実施期間が進むごとに実施率が安定した参加者と、実施率が減少していった参加者に分かれる結果となった。

FU期では、週0日の実施率の参加者が、第Ⅱ期から大幅に増加したが（48.3%→75.9%）、約2～3割の参加者が冬季休業中も家庭学習を継続して実施した（15週24.1%，16週24.1%，17週31.0%）。

第Ⅰ，Ⅱ期に参加児童が取り組んだ内容と実施回数を表3に、チャレンジ日記の主な保護者のコメントを表4に示す。一つの内容を継続して取り組む、一日に複数の内容を行う、日替わりで内容を変える等、取組方に違いが見られた。取り組んだ内容は、台拭き等の手伝いに関するもの、手洗いやうがいといった身近処理に関するものが多く実施された。筆者が提供した動画教材以外の内容に取り組む参加者もいた（S6，S20，S23）。

チャレンジ日記のコメント欄には、「～できるようになった」、「がんばったね」等、子どもの取組を肯定的に捉える記述や、「動画を見て取り組みました」「10

枚たまったら、おかいもの」「タイミングを決めてあげると取り組みました」「かごを用意しておく自分から進んでしてくれました」等、保護者が支援方法を工夫していることをうかがわせる記述も確認された。

FU期では、一部の参加者ではあるが、チャレンジ日記のコメント欄に、「冬休みも手洗いをがんばっています」「タオル畳み以外にも、掃除機や片付けをやってくれました」「デイ（サービス）でも上手やっているようです」等の記述があり、家庭学習が定着していることや活動範囲の広がりをうかがえるエピソードが確認された。

(2) 保護者へのアンケート結果

事前アンケートは29名（回収率100%）、中間アンケートは24名（回収率82.8%）、事後アンケートは19名（回収率65.5%）から回答を得た。アンケート結果を図3，4，自由記述（抜粋）を表5に示す。

1) 家庭学習の頻度

事前と事後の家庭学習の頻度を比較すると、毎日（7.4%→15.8%）、週2，3日（44.4%→63.2%）、週1日（18.5%→26.3%）、ほとんどない（29.6%→0%）であった。事前、事後ともに回答した19名の家庭学習の頻度を比較すると、事前よりも家庭学習の頻度が増加したのが10名（55.6%）、変化なしが7名（38.9%）、低下したのが2名（11.1%）であった。

2) 児童用オンデマンド動画教材の評価

事前、中間、事後の評価平均は、「重要性」が4.1→4.4→4.8、「優先性」が3.8→4.4→4.2、「実用性」が4.0→4.3→4.5であった。「優先性」を除く項目で回を重ねるごとに平均点が向上した。

表3 参加者の取り組んだ内容と実施回数

児童	取り組んだ内容と実施回数	合計	児童	取り組んだ内容と実施回数	合計
S1	キャップはさみ	8	S16	タオル畳み	12
S2	タオル畳み	12	S17	手洗い (8) 台拭き (8) タオル畳み (8) キャップはさみ (8)	32
S3	手洗い (28) うがい (13)	41	S18	タオル体操 (8) 体幹トレ (8) 入浴 (8)	24
S4		0	S19	手洗い	41
S5	タオル体操 (8) 靴そろえ (5)	13	S20	台拭き (12) その他 (洗濯) (4)	16
S6	台拭き (11) タオル畳み (7) その他 (10)	28	S21	手洗い	4
S7	ペットボトル洗い (16) 踏み台 (19)	35	S22	ペットボトル洗い	22
S8	手洗い (3) うがい (2) 台拭き (4) ペットボトル洗い (3) タオル体操 (1) 体幹トレ (4) 靴そろえ (1) デザート (1)	19	S23	その他 (音楽を聴く)	53
S9	台拭き (5) 靴そろえ (1) シートベルト (18)	24	S24	手洗い (16) 台拭き (20)	36
S10	タオル畳み	41	S25		0
S11	ドアノブ (2) 踏み台 (1)	3	S26	台拭き	8
S12	ペットボトル洗い	79	S27		0
S13	台拭き	26	S28	手洗い (1) 台拭き (2) タオル畳み (1) ペットボトル洗い (8) ドアノブ (1) タオル体操 (1) 体幹トレ (2) キャップ (1)	17
S14	うがい (44) 台拭き (65) ドアノブ (15) ペットボトル洗い (44) タオル体操 (13) 紐結び (5)	186	S29		0
S15	手洗い	1			

※第Ⅰ、Ⅱ期の実施回数（FU期は除く）括弧内は各参加者が取り組んだ実施合計数の内訳を示す。

表4 チャレンジ日記の主な保護者コメント（筆者が抜粋し分類した）

<p>保護者の困り感に関する記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やり方が自己流になってしまかなか見本通りにはできませんでした。 ・がんばろうとおもいつつも、家事に追われてできずにすみません。
<p>児童の取組を肯定的に捉えた記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タオルをきれいに広げて端と端を合わせるようにしてたたんでくれました。 ・きまぐれで逃げていくこともあります、手洗いが好きになっています。 ・家族全員分の靴をきれいに根気よく並べました。 ・私がしていたら真似するようにお手伝いをしてくれました。これからも子どものペースでお願いしようと思います。 ・画面をニコニコして見ながら取り組めました。・動画を一生懸命見ながらとてもがんばっていました。 ・シールからシールへの拭き方も上手になってきています。・シールを貼るのが楽しみになっています。
<p>称賛、励ましに関する記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上手に洗って、ふせて置けるようになったね。すごい。・がんばってチャレンジやってくれています。 ・シートベルトを学校の行き帰りもできるようになってきたね。・タオルをよく見ているね。ひきつづきがんばろう。 ・毎日できるようにお母さんとお手伝いをがんばりましょう。・冬休みも手洗いをがんばっています。(FU期) ・タオル畳み以外にも、掃除機や片付けをやってくれました。(FU期)
<p>支援方法の工夫に関する記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・動画に合わせてゆっくり洗っています。・しっかり動画を見てできました。 ・カード一枚ずつと100円を交換して自分で財布に入れ、自分で財布を持って買い物に行きました。 ・時間帯、タイミングを決めてあげると、あ～次はこれね、とスムーズに取り組めました。 ・雑になってきたので母子ともに動画を見ておさらいしています。・10枚たまったら、100均でおかいもの。 ・「～をしよう」と言うと準備できるようになったね。・かごを用意しておく自分から進んでしてくれました。 ・デイ（サービス）でも上手やっているようです。(FU期)

3) 保護者用オンデマンド動画教材の評価

中間、事後の評価平均は「理解」が4.7→4.7, 「実用性」が4.2→4.2であった。

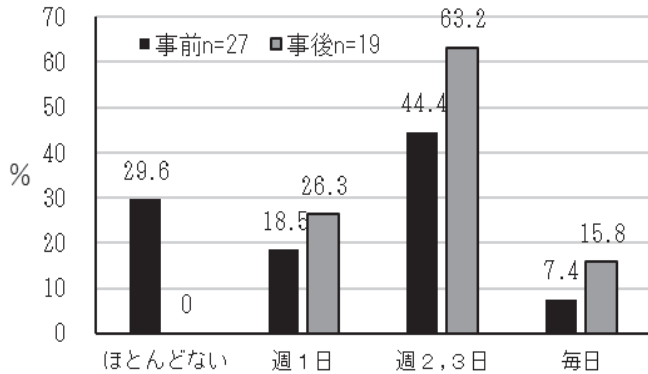


図3 家庭学習の頻度 (保護者アンケートより)

4) チャレンジ日記についての評価

事後の評価平均は、「有効性」が4.0, 「意欲」が3.6, 「負担」が3.9であった。各動画教材よりもやや低く評価された。

5) 本プログラムへの意見, 要望

表5に示したように、事前では、「わかりやすい動画で取り組みそうな気がしました」等、動画教材に対する好意的な記述があった一方で、「いつも見ているEテレを見てしまう」といった取組への困難さを示す記述もあった。中間では、「ほめられると本人の気持ちも変化しているようなので、母も頑張れます」等、児童の変容を記述した感想が見られた。一方で、「動画の流れがはやいので子どもがついていけない」等の記述があった。事後では、家庭学習が定着している様子や、長期休みへの継続を考えていることがうかがえ

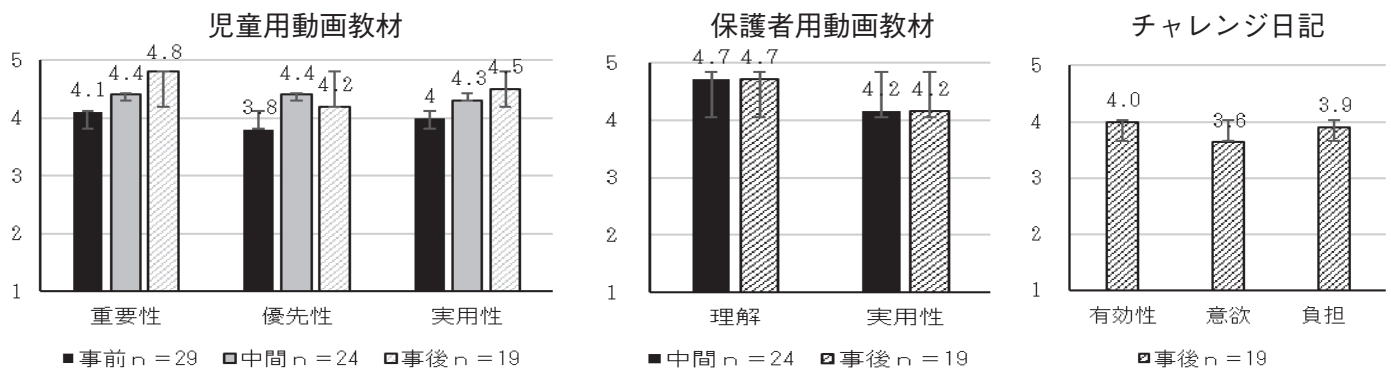


図4 保護者によるアンケート評価結果

表5 保護者による本プログラムへの意見, 要望 (抜粋)

事 前
・わかりやすい動画で取り組みそうな気がしました。・動画を見ただけで子どもが自分から取り組みました。
・実際に人物が登場し、台拭きの矢印でのやり方を説明して子どもにもとてもわかりやすいと感じました。
▼YouTube自体を楽しい遊びのものと思っているので「なんだ、こんなのか・・・」みたいな様子ではありました。
▼できればやらせたいのですが、子どもを誘うタイミングが悪いのかまだ取り組めていません。
▼いつも見ているEテレを見てしまう。
中 間
・ほめられると本人の気持ちも変化しているようなので母も頑張れます。
・昨日はじめて自ら蛇口をひねり、手を洗い始めました。行動が習慣化してきたのかもしれない。
▼チャレンジ毎日できてないです。YouTubeで見せるのですが他に覚えられてしまい、見せるのに苦労します。
▼動画の流れがはやいので子どもがついていけない。
事 後
・担任の先生にアドバイスをいただきながらやっています。・日課として子どもにも定着してきていると感じます。
・冬休み中にお手伝いしてもらおうと思います。
▼最近、取り組めていません。

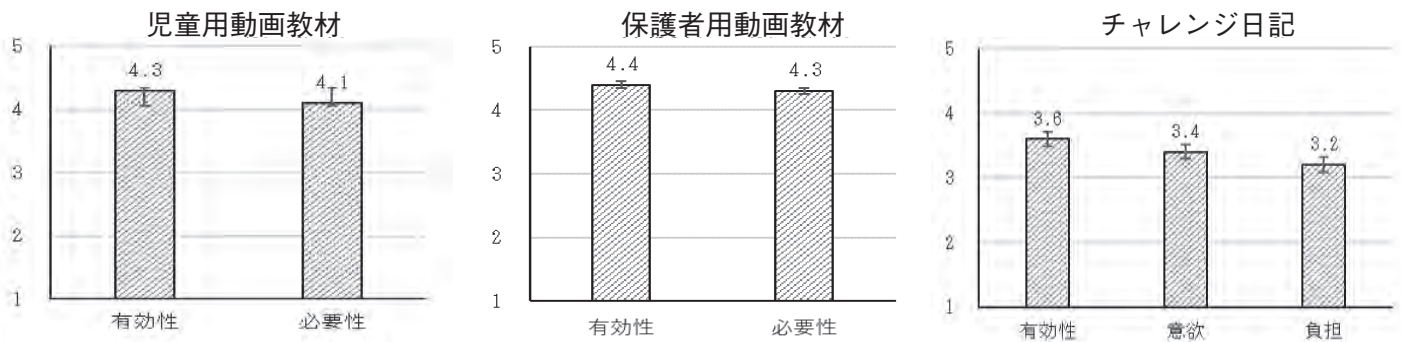


図5 担任教師によるアンケート評価結果 n=21

表6 担任教師による本プログラムへの意見、要望（抜粋）

- ・家庭での様子を保護者がお知らせしてくれることで学校での活動に生かすことができた。
- ・家庭での課題を設定したり取り組んだりするよいきっかけになったと思います。YouTube教材も保護者にとっては支援について考え方をわかりやすく、担任からはなかなか伝えきれない部分が丁寧に伝えられていると感じました。
- ・YouTube教材は家庭でのより良い過ごし方についての啓発や提案になったと思う。手伝いのみを選択していた児童が家庭でも運動を始めるきっかけとなる等、動画教材の提供がこれまで関心のなかった課題内容に取り組むきっかけとなり、保護者に新たな視点を与えた。
- ・動画で見て手伝いや運動に取り組むというのはわかりやすいし手軽でよい方法だと思いました。
- ▼担任としては、全て家庭での取組になってしまい上達している様子が把握し切れなかったのが残念でした。
- ▼チャレンジの内容を学校でもできればよかった。
- ▼保護者のコメントもたくさん書いてくださっていたのに対して十分な助言等ができていなかったと反省です。
- ▼チャレンジ日記をもってきたときだけでなく、普段からの保護者への支えが必要であると感じた。

※・肯定的意見 ▼否定的意見、課題

る記述が確認された。

(3) 担任教師へのアンケート結果

参加者の担任教師21名（回収率87.5%）より回答を得た。アンケート結果を図5、自由記述（抜粋）を表6に示す。

1) 児童用オンデマンド動画教材の評価

評価平均は「有効性」4.3、「必要性」4.1であった。2名が「わからない」と回答した。自由記述より、動画教材が家庭での課題設定のきっかけやより良い過ごし方の提案になったことが評価された。

2) 保護者用オンデマンド動画教材の評価

評価平均は「有効性」が4.4、「必要性」が4.3であった。3名が「わからない」と回答した。自由記述より、保護者用の動画教材が、日頃の保護者とのかわりでは十分に伝えられていない内容であったと評価された。

3) チャレンジ日記についての評価

評価平均は「実用性」が3.6、「意欲」が3.4、「負担」が3.2であった。各動画教材に比較するとやや低い評

価となった。

4) 本プログラムへの意見、要望

表6に示したように、肯定的な意見があった一方で、保護者への助言の不十分さや難しさを感じたという感想や学校でも家庭と同様の課題に取り組む必要性があったという感想が確認された。

(4) 抽出事例（S10）の指導経過

S10の家庭学習の実施率の変容を図6、指導経過（コメント欄の記述及び支援内容）を表7、課題分析による評価を表8に示す。

1) 第I期の経過

1週目は、タオル畳み以外の複数の課題にも取り組んだが、担任教師との協議の結果、保護者、児童の負担を考えて目標行動を「タオル畳み」に絞った。2週目より、学校の個別指導でも同じ目標行動に取り組むことになり、担任教師と筆者で課題分析による事前評価を行った（表8）。机上でタオルを広げることに困難さが観察された。そこで、机上に収まるサイズで、四隅にフェルトで目印を付けたタオルを用意した。4

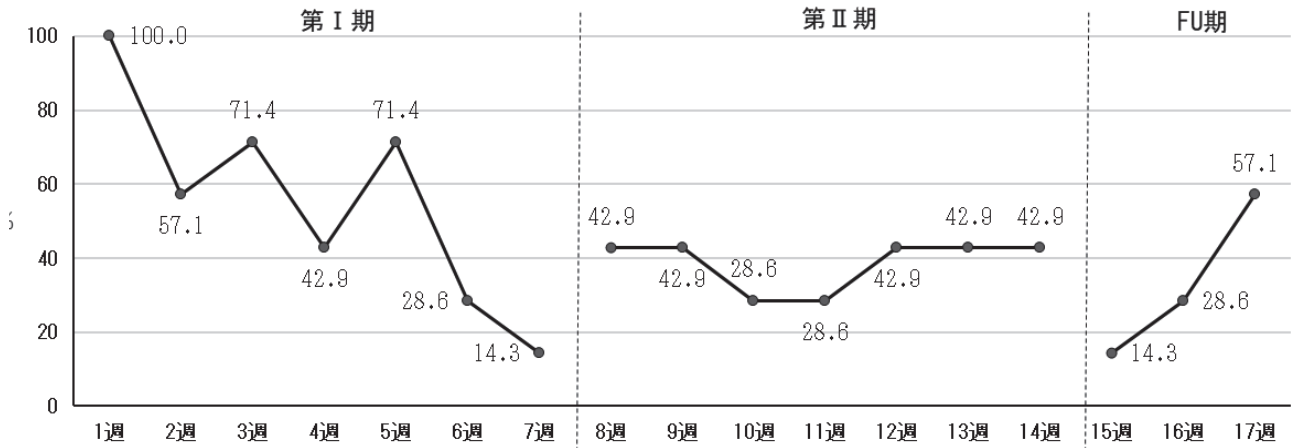


図6 S10の家庭学習の実施率の変容

表7 S10の指導経過

	保護者コメント欄 (抜粋)	教師のコメント欄 (抜粋) 及び支援内容 (下線部分)
第Ⅰ期	1～2週 「少しやり方がわかってきたね」 「はしっこを持てるようになってきたね」	家庭での取り組みやすさを優先することを伝える。 <u>学校でも同じ目標行動に取り組む。課題分析し、事前評価を行う。(表8)</u>
	3～5週 「はしっこをきちんと合わすそーとね」 「雑になってきたので、 <u>実際にはしを合わせるためにしばらく母が手を持って一緒にしてみようと思います</u> 」	<u>担任教師を通じて家庭の状況(タオル畳み方や枚数等)を尋ねる。</u> <u>保護者の畳み方に合わせた動画教材と印付きタオルを提供する。</u> 「目印のシールをよく見えていますね」「学校でも頑張っています」 「学校でも手を添えています、少しずつ手がかりを見ながら調整できるといいですね」
	6～7週 「今週末はほとんどできていません、雑にならないよう声掛けしてさせたいと思います」	「お母さんとS10くんのタイミングや気持ちがあった時に <u>取り組むのでいいと思います</u> 」「 <u>少しずつ上手になってきていますね</u> 」 <u>既にできている活動やタオルを畳む以外の部分でも、チャレンジ日記を使って称賛する機会を増やすことを助言する。</u>
第Ⅱ期	8～9週 「この頃さぼり気味だったので、またポチポチですが、 <u>がんばりたいと思います</u> 」「 <u>先生が言ってくださったように、かごに入れたタオルを運ぶだけでも</u> 」	「 <u>タオル運びなら決まった時間、場所で、一人で取り組めそうですね</u> 」「 <u>畳み方のスキルアップはお母さんが余裕のあるときで</u> 」 <u>中間評価を行う。(表8)</u> <u>畳んだタオルをかごに入れる工程を取り出して練習することを担任教師に提案する(保護者にも動画教材を提供)。</u>
	10～14週 「先生からお借りしている印付きタオルだとわかりやすいようです」 「かごを洗面所に持って行くところまでできています」	「 <u>S10くんも上手にできてほめてもらう機会が増えますね</u> 」 「 <u>取り組みやすくなりましたね</u> 」 「 <u>学校でも『ぴったんこ』と言いながら頑張っています</u> 」 <u>事後評価を行う。(表8)</u>
FU期	15～17週 「 <u>畳んだ後、私が忘れていると、自分で運んでくれます</u> 」 「 <u>運ぶ方が好きなようです</u> 」	「 <u>年末年始もほぼ休みなくがんばりましたね、素晴らしいです</u> 」

表8 S10の課題分析による評価（タオル畳み）

	事前	中間	事後
1 タオルを広げる	×	○	○
2 タオルの両端をつまむ	△	○	○
3 半分に折って両端を合わせる	△	○	○
4 3を繰り返す	△	○	○
5 かごに入れる	△	△	△
6 片付ける	○	○	○

※○一人でできる △補助あり ×できない

週目には、担任教師を通じて保護者に家庭でのタオル畳みの様子を聞き取りした。その情報を基に動画教材を修正し、学校と同様の目印付きタオルとともに保護者に提供した。チャレンジ日記の目標欄には、「はしっこを合わす、そーっとね」等、保護者による具体的な目標が記述された。

家庭学習の実施率は、1週目（100%）、2週目（57.1%）、3週目（71.4%）、4週目（42.9%）、5週目（71.4%）と上下しながらであるが、週に3、4日の実施が確認された。6週目には、S10の体調不良等により実施率が低下した（71.4%→28.6%）。担任教師のコメント欄には、保護者に無理をさせず、励ます記述が目立った。また、筆者からは担任教師を通じて、既にできているところに注目し、称賛する機会を増やすことを助言した。

2) 第Ⅱ期の経過

8週目に担任教師が中間評価を行った（表8）。タオルを机の上に広げ、端を合わせて半分に畳むことができるようになり達成度が向上した。また、畳んだ後、かごに入れる際に、片手で握ってしまうため形が崩れてしまう様子が確認された。そこで、畳んだタオルを丁寧に重ねることを課題とし、新たな動画教材を作成し保護者にも提供した。14週目の事後評価では、畳んだタオルをかごに入れるときに、依然として形は崩れるものの両手で持つことができ、自ら「そーっと」と言いながら取り組む様子が確認された。

家庭学習の実施率は、8週目に上昇し（42.9%）10、11週に低下したが（28.6%）、12週から14週にかけて（42.9%）週3日の実施ペースが維持された。保護者のコメント欄には、「印付きタオルだとわかりやすい」「カゴに入れたタオルを運ぶだけでも」の記述が見られ、補助具の活用やS10ができる部分に注目した取組が報告された。

3) FU期の経過

冬季休業に入り、15週目に実施率が下がったが（42.9%→14.3%）、16週、17週にかけて上昇した（28.8%→57.1%）。チャレンジ日記のコメント欄には、「畳んだ後、私が忘れてると、自分で運んでくれます」「運ぶ方が好きなようです」等の記述が見られた。

4. 考察

以上の結果から、家庭学習の実施及び継続への本プログラムの有効性が示唆された。各動画教材は、児童、保護者にとって家庭学習の課題内容ややり方について理解を促し、家庭学習の実施に影響を及ぼしたと考える。しかしながら、児童用の動画教材に対して児童の反応が乏しかったり、保護者のニーズに合わなかったりした場合があったことから、児童の実態を把握している担任教師が、積極的に個に応じた動画教材の作成に関わることやチャレンジ日記を通じて支援を調整する必要があったと考える。

抽出事例の結果からは、動画教材の改善や支援ツールの提供等、支援を個別化していくプロセスの重要性が示された。学校でも家庭と同様の取組を実施し、保護者の心理状態に配慮した励ましや、児童のできる部分に注目する等の助言を行ったことが、保護者の児童への支援行動に好影響をもたらしたと考えられる。

IV. 総合考察

1. ICTを活用した家庭学習支援の条件

(1) 児童用オンデマンド動画教材

手伝いや身辺処理に関する課題が多く取り組まれた。いずれも家庭生活に即した内容で、準備する道具が少なく簡便であったことが、家庭での実行性を高めたと考えられる。保護者の自由記述に「動画を見ただけで子どもが自分から取り組みました」とあるように、児童にとって日常生活と関連が深く、イメージを持ちやすかったことも実行性を高める要因となった。また、「雑になってきたので母子ともに動画を見ておさらいしています」の記述から、保護者にとっても、動画教材の「モデリング」部分が児童に教える際の参考になっていたと言える。

また、複数のコンテンツがあることで、各家庭の状況や児童の実態に合わせて取り組めそうなものを選択する機会になった。従来のプリント教材等の提供と比較し、保護者や児童の選択の幅が広がり新たな試みを促した。担任教師の自由記述の「動画教材の提供がこれまで関心のなかった課題内容に取り組むきっかけと

なり、保護者に新たな視点を与えた」からも裏付けられる。保護者が複数のコンテンツの中から児童ができそうなものを選ぶことは、児童のできる部分や可能性に注目することを促し、新たな家庭学習の選択肢を広げる契機になったと考える。

一方で、保護者が児童に動画を見せる際の困難さが課題となった。児童に合う動画教材がない場合に、一部の保護者から作成の要望があった。抽出事例においても、児童のつまずきや家庭でのタオルの畳み方に合わせて動画教材を修正したり、学校で使用している支援ツールを提供したりした。このように、動画教材の提供で終わるのではなく、個々のニーズに応じて支援を調整するプロセスは家庭学習の取り掛かりや継続に欠かせないものであった。

本研究では、筆者が作成した動画教材を配信する形式であり、保護者や担任教師からの要望がない限り、個に応じた動画教材の提供や修正が行えなかった。筑波大学附属久里浜特別支援学校の先行事例（2020）のように、児童の実態をよく知っている担任教師が動画教材の作成に関わることが求められる。

（2）保護者用オンデマンド動画教材

保護者自身が、課題に誘うタイミングやトークンシステムの活用等による支援方法の工夫していた。これは、保護者用の動画教材の内容（「望ましい行動の増やし方」等）が反映された支援行動であると推察でき、児童への肯定的なかかわり方に影響を及ぼしたと考える。

臨時休業中に多くの保護者から困り感として挙げられた「生活リズムに関すること」に対応するには、児童のできそうな課題を見出し、生活習慣に組み込むことが求められる。新たな習慣を形成する際の児童の抵抗や失敗といった事態は保護者の不安や意欲低下につながる恐れがある。1週目に提供した「チャレンジを始めるためのポイント」は、課題の促し方やタイミング等の内容で、家庭学習の開始時の保護者の不安を解消するのに効果的であったと考える。

担任教師アンケート結果の「担任からはなかなか伝えきれない部分が丁寧に伝えられている」という自由記述から、保護者用の動画教材が、日頃の保護者とのやりとりだけでは十分に伝えられない内容であったことがうかがわれ、保護者支援の方法の一つとして可能性が見出された。

2. チャレンジ日記が家庭学習の継続に及ぼす効果

家庭学習の継続に及ぼしたチャレンジ日記の効果について述べる。チャレンジ日記の保護者コメント欄には、児童の取組に対する称賛の記述が多く見られ、保護者が児童を肯定的に捉えていることがうかがえた。教師のコメント欄にも、児童、保護者の取組に対して称賛、励ましのコメントが多く確認された。児童にとっては、シールを貼ることが課題遂行の強化子となったケースや、シールを貯めてご褒美と交換するトークンシステムに発展したケースもあり、家庭学習への意欲を高めるのに機能した。このように、児童、保護者、担任教師が互いに強化し合う関係性を築くことが家庭学習の継続に重要であり、その関係性を築くためのツールとして、チャレンジ日記の有効性を確認することができた。

高島・星山・武蔵（2017）は、通級指導教室でのグループ活動において、チャレンジ日記の記録に加えて、児童がチャレンジしたことを学級の友達や担任教師の前で発表し合い、児童同士が相互に評価し合う機会を設けている。本研究では、児童の取組に対して保護者、担任教師からの称賛は行われたが、児童同士で互いに称賛し、評価し合う機会は設定することができなかった。チャレンジ日記をさらに活用することで、児童、保護者、担任教師が強化し合う関係づくりだけでなく、児童同士が互いの頑張りを認め合い、称賛し合う関係づくりへと発展できると考えられる。

連絡帳は児童の様子や事務連絡等を幅広くやりとりするものであるが、チャレンジ日記は、具体的な目標行動に話題を絞って継続的にやりとりを行うことができる。抽出事例のように、家庭学習の児童の様子を情報共有することで、担任教師は、家庭での児童の様子を知り、家庭状況に即した支援を考える機会が得られた。このように、チャレンジ日記には、本人や保護者を強化するだけでなく、取組の様子や保護者の困り感をモニターする機能があり、個々のニーズに合わせて支援を調整するための情報を得ることができる。

チャレンジ日記は、日々の連絡帳とは別に設定されたものであった。アンケート項目の「負担」の評価平均は保護者3.9、担任教師3.2であったが、ばらつきが大きく、負担感じている保護者や担任教師が存在した。負担軽減にはチャレンジ日記を日々の連絡帳と一体化することや、チャレンジ日記をICT化する等の工夫が考えられる。チャレンジ日記をICT化することにより、記録が簡便になり、情報の管理や共有がしやす

くなるであろう。その実現には、校内システムの構築や個人情報の保護等、運用上の課題をクリアし、個々の児童に合わせた提示方法や操作方法の指導を検討する必要があると考える。

一方で、家庭学習の実施日数が低下した参加者がいた。各参加者の実施日数が低下した理由は明らかではないが、担任教師の自由記述に、「家庭学習に積極的に関わることができなかった」ことが課題として挙げられた。家庭学習の継続には、学校でも同様の取り組みを行い、児童の実態や取組の様子を積極的に情報共有する必要があったと考える。

3. 今後の課題

知的障害特別支援学校におけるICT活用の今後の課題について述べる。まず、学校でのICT活用において、家庭での使用を想定することである。本研究では、筆者が全ての動画教材を作成し、各家庭に提供を行った。今後、本実践を広めるには、各担任教師が動画教材の作成に携わる必要がある。日々の授業において、動画教材は、課題のやり方や活動の見通し等を示すために、よく使用される支援方法の一つである。そのため、動画教材の作成時に、授業に加えて、予め家庭での使用を想定して作成し、家庭にも提供する視点をもつことができれば、担任教師の負担は軽減され、学校と家庭で共通の課題に取り組むことが促進されることが考えられる。

また、動画教材の提供方法についても検討が必要である。本研究では、QRコードを読み取る方法で動画を配信した。GIGAスクール構想の推進により、一人一台タブレットが実現されつつある現状から、ファイル共有やタブレットの持ち帰り等、提供方法の選択肢が広がるのが想定できる。例えば、各児童のタブレットに動画データを入れて家庭に持ち帰り、動画を参照しながら課題に取り組むことや、学校や家庭での学習の様子を記録し、振り返りや発表等の双方向のやりとりに活用することも可能になる。

しかしながら、ネット環境やICT機器を整えるだけでは、知的障害のある児童が家庭で自発的に活用できるようになるとは限らない。従前の授業内容の提示等、教師主体のICT活用に留まるのではなく、児童主体のICT活用の促進が課題となる。児童自身がICT機器の準備から片付けまでを行うことや、活動の手掛かりや記録、発表等のツールとして日常的に活用する機会を意図的に設定することが求められる。このような

学習機会を通じて、児童がICT機器の扱いに慣れ、その必要性や有効性を十分に実感できるように、授業のみならず、学校での生活や日課活動を改善していく視点が必要であると考えられる。

さらに、家庭での使用を想定するためには、家庭生活の状況を把握し、学校と家庭で、目標をすり合わせる必要がある。本研究では、コロナ禍の影響で家庭訪問が実施されず、従来の目標立案の時期を逸しており、目標のすり合わせに動画教材を活用することができなかった。今後は「個別的教育支援計画」の立案時に活用し、授業において家庭学習を視野に入れた取組を家庭学習と同時並行的に継続していくことが望まれる。そのことにより、家庭学習の実施日数が低下したり、チャレンジ日記の提出が一度もなかったりした参加者へのより柔軟な対応が可能になると考える。

FU期では、一部の参加者であるが、冬季休業中も家庭学習が継続され、児童の家庭生活の質が向上していることがうかがえた。学校と家庭で共通の課題に取り組むプロセスの中で、家庭の状況を的確に把握し、児童、保護者、担任教師の相互強化関係を築いておくことが重要である。このような関係性を基にして、児童、保護者の前向きな取り組みを促し、家庭学習への自信を育むことが、長期休業中の家庭学習の維持につながると考える。

謝辞

本研究に参加してくださった、児童、保護者の皆様、ご協力いただいた先生方に深く感謝いたします。

付記

本研究は、香川大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻における実践研究報告をまとめ直したものである。

文献

- 青木高光 (2020) ポストコロナではなくポスト学校につながる支援. 特別支援教育の実践研究会 (編), withコロナ時代の特別支援教育. 明治図書, 34-37.
- 武蔵博文・高畑庄蔵 (2003) 知的障害生徒の問題行動に対する家庭・学校連携による支援—支援ツール「ほめたよ日記」を活用して—, 特殊教育学研究, 40 (5), 493-503.
- 武蔵博文・高畑庄蔵 (2006) 発達障害のある子とお母さん・先生のための思いっきり支援ツール. エンパワメント研究所.

文部科学省（2020a）「新型コロナウイルス感染症対策のための学校の臨時休業に関連した公立学校における学習指導等の取組状況について」令和2年4月16日発表。

http://www.mext.go.jp/content/20200421-mxt_kouhou01-000006590_1.pdf（2020年7月現在）

文部科学省（2020b）「特別支援学校における新型コロナウイルス感染症対策に関する考え方と取組」（通知）令和2年6月19日発表。

https://www.mext.go.jp/content/20200619-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2020年7月現在）

岡村章司（2015）特別支援学校における自閉症児に対する保護者支援—母親の主体性を促す支援方略の検討—。特殊教育学研究, 53（1）, 35-45.

高島佳江・星山麻木・武藏博文（2017）発達障害児の自己肯定感を高めることを目指す支援：通級指導教室でのグループ活動とチャレンジ日記・発表を通して。発達障害研究, 39（4）, 357-367.

筑波大学附属久里浜特別支援学校（2020）「のびのびチャンネル」令和2年6月15日公開

<https://nobinobich2020.wixsite.com/general>（2020年7月現在）

山上敏子（1998）発達障害児を育てる人のための親訓練プログラム「お母さんの学習室」。二弊社